

世界の
児童文学を
めぐる旅

池田正孝 著





上/ダーウェント湖畔のリングホルム邸。ポター一家がここで避暑に訪れた折に『リスのナトキンのおはなし』が生まれた。
下/ニア・ソーリー村のヒルトップ農場。1905年にポターはこの農場を購入し、翌年建て増してここに住み始める。

『ピーターラビットのおはなし』

ビアトリクス・ポター

湖水地方の自然への強い愛着

ビアトリクス・ポターは、彼女の生涯のうちで、全部で二九冊の絵本を書き上げています。しかし、ポターが絵本制作に集中して取り組んだのは、一九〇二年作の『ピーターラビットのおはなし』から一九一三年作の『こぶたのピグリン・ブランドのおはなし』までの一二年間でした。そのうち前半期と後半期では、ポターの制作姿勢に明白な差違が見てとれます。

前半にあたる頃、ポター一家は湖水地方北部のケズイック町近くにあるフォーパーク邸やリングホルム邸などを借りて避暑生活をしており、そこの暮らしぶりはお客様扱いのものであったといえるでしょう。これに対して一九〇五年以降、ポターはウインダムミア湖南西部ニア・ソーリー村のヒルトップ農場を購入し、両親と別れてひとり住まいを始めます。それまでとは違い、全て自分



上／草花が咲き乱れるヒルトップ農場の自宅。
左／ニア・ソーリー村では百年前と同じ郵便
ポストが今も使われている。ポターはこのポ
ストにピーターが手紙を入れている絵柄のク
リスマスカードを描いている。

ポターが16歳の時、初めて湖水地方を訪れた際に滞在した城のような邸宅、レイ・カースル。



で切り盛りする生活者としての暮らしに変わるわけですが、そうした身近上の変化が、ポターの制作活動にどのような影響を与えたのでしょうか。

ポターはかつて自分の絵本づくりの姿勢について、米国のある雑誌につきのように寄稿しています。

「私は書くことが好きで、それに集中することは苦にならない。しかし注文されて書くことは苦手です。私が書くのは自分自身がたのしむためなのです」

おそらく彼女のこうした姿勢は、生涯変わらなかったことでしょう。しかし後半期の絵本づくりでは、そのたのしみの内容が随分と変化しているような気がします。

例えば一九〇七年作の『こねこのトムのおはなし』には、ポターが住み始めたヒルトップ農場がトウィットさん一家の自宅として登場します。彼女はやつと落ち着いた暮らしを始めることのできたこの住まいに強い愛着を持ち、本の中に描かずにはいられなかったのでしょう。しかもこの頃にはヒルトップ農場の建て増しも終わり、ポターは庭づくりに夢中でしたから、花の咲き乱れる庭までも作中に登場させています。

あちこちに顔を出す実在の村人たち

ポターのこうした想いは更につのり、翌年作の『あひるのジマイマのおはなし』では、ヒルトップ農場とそこで暮らしぶりをもっと詳細に、もっと愛情



上/「王さまの納屋」に出てくるチャントンベリ・リング（土塁の輪）は鉄器時代の砦跡。以前はこのような円形のブナの森が見られたが、1990年代に嵐でなぎ倒され、今は見る影もない（写真は1979年に撮影）。下/ホズホースにはハリエニシダが群生し、夏になると鮮やかな黄色の花を咲かせる。

『リング畑のマーティン・ピピン』

エリナー・ファージョン

石井桃子さんの足跡を追って

英国の南端に広がるサセックス地方は、英仏海峡に面し、気候の温暖な地域です。この地には高い山がなく、僅かに東西に長く伸びるサウスダウンズと呼ばれるゆるやかな丘陵が目立つ程度です。この丘陵の屋根に沿ってアップ・アンド・ダウンを繰り返す全長一二〇キロに及ぶロングフットパスは、英国人お気に入りの遊歩道として知られています。

今から五〇年も前、児童文学作家・翻訳家の石井桃子さんはエリナー・ファージョンの『リング畑のマーティン・ピピン』を訳された後、作品の舞台であるサセックス地方を訪れました。そして帰国後、その旅行記「一九七二年初夏イギリスの旅」を岩波の「図書」に掲載します（一九七三年一〜二月、のちに『児童文学の旅』〔岩波書店〕に再録）。その直後に英国を初めて訪問した私は、石井さんの旅行記に導かれるように、雄大な景色のサセックスを何度と



リンゴ畑の
マーティン・ピピン
エリナー・ファージョン(著)
石井桃子(訳) / 岩波少年文庫

陽気な歌手のマーティン・ピピンが、
六人の乙女たちに美しく幻想的な恋物
語を語り始める。サセックスの美し
い自然を背景にした、繊細で幻想的な
作品。



ダウンズを歩き、自然に親しむ喜びを教えてくれた亡き友、エドワード・トーマスへの愛が存在することに気づいたのです。なにかなく、「夢の水車場」のヒロイン、ヘレンはファージョンその人を現しており、この作品はトーマスへの秘めた想いを告げた物語だったといえるでしょう。「リンゴ畑のマーティン・ピピン」は、詩人トーマスに捧げる「レクイエム(鎮魂曲)」であったといってもよいのかもしれませんが。

『ヒナギク野のマーティン・ピピン』は、題名、内容共に『リンゴ畑のマーティン・ピピン』の続編とも言うべきものですが、『リンゴ畑……』から一六年後に刊行されたことから、前者のような熱気とオーラは感じられません。物語は舞台をサセックス全体に広げており、ウィルミントンの背高男とか、セブンススターズなどの名所を背景にして、ファージョン独特のファンタジーが展開します。

そのうちの一文「エルシー・ピドック、夢で縄とびをする」は、ファージョンも特にお気に入りの物語で、英米の図書館では子どもに語り聞かせるお話として今も変わらぬ人気を呼んでいます。この物語はルイス近在のケーバーン山を舞台にしていますが、実はファージョンがホウトン村のエンディコットという農家に滞在した際に生まれたものです。家の庭先にはいつも近所の子どもたちが遊びに来ていて、その中の縄とびの上手なエルシー・パテックちゃん protagonis 人公のモデルとなりました。ファージョンが住んでいたという元の牛舎はなくなりましたが、母屋のエンディコットは今もそっくり残っています。



上/英仏海峡に面する白亜のクリフ(崖)、セブンススターズ。その頂きをサウスダウンズ・ウエイが貫いている。右/『ヒナギク野のマーティン・ピピン』に出てくる「ウィルミントンの背高男(ロングマン)」は、石灰質の丘陵地帯に刻まれた地上絵。



家が住んでいたデイリーナリーと庭を一〇〇年以上前と変わらぬ姿で望めます。この庭の片隅には、大きな枝を伸ばしたホース・チェスナットの老樹も残っています。かつてアリス・リデルの飼い猫ダイアナがこの枝に好んで登ったことから、物語の中にチェシャー猫として取り入れられ、ジョン・テニエルの挿絵ではニヤニヤ猫として描かれました。それ以来、すでに百余年も経っているにもかかわらず、この老樹は支柱に支えられて何とか寿命を保っています。また

Column 1
うつくしきマリー・マロン

『トムは真夜中の庭で』の二第三章には「うつくしきマリー・マロン」の歌の一節が登場します。この歌は英語圏の民衆のあいだで広く歌い継がれたアイルランドの民謡です。ダブリンで魚の行商をしていたマリー・マロンが熱病にかかり、若くして死んだあと、幽霊となって手押し車をおしながら魚介類を売り歩くといった内容のものです。

この歌の最後のリフレインを口ずさむハティに向かって、トムはがまんできずに「いったい、どんなもんだろう。——死んで、幽霊になるって気もち？」と聞



いてしまいます。これが口火となって、二人は互いに相手を幽霊だと決め付けて喧嘩となります。

ところで「トムの家」を訪問してから二〇年経って、アイルランドを旅した私は、ダブリンの目抜きにあるグラフトン通りで、偶然にもマリー・マロンの銅像に出会いました。この銅像は一九八八年、ダブリン建都千周年を記念して新しく建てられたものです。十七世紀の衣装をつけた、あでやかなマリー・マロンが手押し車をおしながら魚介類を売り歩く姿は、ダブリンを訪れる観光客の新しい風物詩として人気を呼んでいるようです。現在では一九九九年六月一三日をマリーが亡くなった日と推定し、六月一三日を「マリー・マロンの日」と決めて記念しています。

「マリー・マロン」は今日、アイルランドやイギリスで知らぬ人がないくらいポピュラーな歌となっています。ラグビーのアイルランド代表をはじめ、ダブリンを本拠地とするさまざまなスポーツチームの応援歌として知られるほか、アイルランド出身のシンニード・オコナーなど多くの歌手がこの曲を歌っていますし、映画『時計じかけのオレンジ』にもこの歌が登場します。

北欧を舞台にした作品





クマネズミとドブネズミの争いの舞台となったグリミング城。スコーネ地方の東南部にある堅固な石造りの砦である。

シリアン湖のほとりでは長い栈橋が湾内に突き出ている。祭りの夜にはその先端で人々が合唱する。



発表していきます。そして一九〇九年には、ラーゲルレーヴはスウェーデン人として、また女性としてはじめてのノーベル文学賞を受賞することになります。

地理の教材だった『ニルスのふしぎな旅』

話は少しさかのぼりますが、ラーゲルレーヴはある小学校の校長から、九歳から十一歳の子どもが自然や地理を学ぶための読本教材の執筆を依頼されます。スウェーデンでは一八四二年に初等教育が義務化され、二〇世紀に入ると、現場の教師たちは新しい教育のあり方を模索していました。こうした教育の近代化の流れに共鳴していたラーゲルレーヴは執筆を承諾します。

お話を楽しみながら自国の地理を子どもが学べるように、ラーゲルレーヴは小人になったニルスという少年をガチョウに乗せてスウェーデンを一周させる物語を仕立てます。これが一九〇六年に『ニルスのふしぎな旅』の第一巻として発表され、続いて翌年には第二巻が発刊されます。このお話は、どうやらアデルセンのお話ヒントを得て生み出されたようです。

ラーゲルレーヴが子どもたちにスウェーデンの自然と地理をどのように学ばせたか、その一端を紹介してみよう。スウェーデンは、国土の六〇パーセントが森林に覆われています。ただ大地のかなりの部分が農業に適さないやせた土地であるため、イギリスのように森林を伐採して農地や牧草地

カールスクローナ広場のフレデリック教会堂
前に立つカールXI世の銅像。



赤く塗られた木造の提督教会。その入口には
教会の堂守ローゼンブムの木像が立っていて、
カールXI世の銅像に追いつけられたニルスを
助けてくれる。

